

カザフでのご聖体礼拝

昨年10月のシノドゥスにおいて、共産主義時代のカザフ共和国での聖体礼拝について証言が出た。

アタナシオ・シュネイダー神父が語った思い出の一つに、自分が子供のときに知ったある司祭の話がある。「それはカザフで1963年12月30日に殉教された福者アレッシオ・サリツキー神父様のことです。1950年代のこと、ウラル地方に流刑になっていた信者たちを秘密裏に訪問されていました。その地方には私の両親も連れてこられていたのですが、あるとき母が神父様に重態に陥っていた私の祖母のために聖別されたホスチア（ご聖体）をもらえないかと尋ねました。それは祖母が死ぬ前にもう一度ご聖体を拝領したいと言っていたからで、またあの遠隔の地に司祭が今度いつ来るかまったくわからなかったからです。福者アレッシオ神父は一つの聖別されたホスチアを母に渡し、どのような畏敬の心をもってそれを扱うかを教えました。祖母の臨終のときが来ると、母は真っ白の手袋をはめ、ピンセットでご聖体をつかんで祖母に与えました。それが祖母の旅路の糧となりました。母は祖母にご聖体を与えるとき、心の中で聖体拝領を望みましたが、それができないので霊的に聖体を拝領しました。母は何年も本当の聖体拝領ができずに過しましたが、その霊的な聖体拝領のおかげで、母や迫害下に信仰を守り、ご聖体に対する愛と崇敬心を持ちつづけることができたのです。」

家庭礼拝堂

他方、カラガンダの司教ジャン・パウエル・レンガ司教は、自分の司教区では聖体の年を「全教会と一致するようにとの呼びかけ、聖体を中心にした生活をするようにとの招き」として生きたと説明した。

共産主義の時代、聖職者の不足と迫害のため「家庭礼拝堂」というものが生まれた。それは盗みや汚聖の危険のないと思われる信仰深い人の家に作られた、小さな礼拝堂である。そこにご聖体を安置し、司祭は秘密裏にミサをたて、告解を聞き、信者に教理を教えた。現在でもいくつかの礼拝堂が残っている。「これらの人々がご聖体を前に深い信心をこめて礼拝するのを見るのは感動的だ。何時間も跪いたままでご聖体に祈るのです」と司教は言う。

PALABRA, 503, XII-05, p.22